



発行日：令和3年1月5日

建廃協NEWS新春号

新しい年を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。会員の皆さまにおかれましては、穏やかな天候のなか新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年は十二支では「丑年」、干支としては60年に一度の「辛丑」(かのとうし)となります。解釈の中には「新しいことが広がることで、今までのことが終わる」ともあります。まさに新型コロナウイルス感染症からの脱却に向けた転換期ともなりましょう。転換期だからこそ、下を向かずに上に向かって挑戦する！上に手を伸ばして、何かをつかもうとする！負けてはいけない！という思いです。余談ですが、偶然にも坂本九さんの「上を向いて歩こう」が大ヒットした年も同じ干支である60年前の1961年でした。

昨年2020年は春先から新型コロナウイルス感染症の猛威にさらされて、今なおその脅威を抱えており、人体にも経済にも過去にこれほどまでに大打撃を与えた事は経験に及ぶところではございません。

本来であれば昨夏に56年ぶりの東京でのオリンピック・パラリンピックが開催され、世界各国にあらためて日本という国の素晴らしさを伝えることが出来たはずと、誠に残念な気持ちではありますが、1年後の今夏にその気持ちを晴らしたいと願う次第でございます。

“明けない夜は無い”とも言いますが、長く暗い夜が明けた後には、きっとまぶしい太陽をさんさんと浴びることが出来るでしょう。

さて、新政権も誕生し、菅首相は所信表明で温室効果ガス排出量を2050年までに実質ゼロとする目標を宣言しました。これまでの日本の温暖化対策目標は、まず2030年の温室効果ガス排出量を2013年比で26.0%削減し、さらに2050年までに80%を削減、そして今世紀後半のできるだけ早期に脱炭素社会を実現することを目指すというものでしたが、「実質ゼロ」を掲げたのは今回が初となります。日本は温暖化対策では遅れをとってきましたが、ようやく欧州連合(EU)などの目標と足並みをそろえた形です。達成に向けては二酸化炭素(CO₂)排出が多い石炭火力発電の扱いや再生可能エネルギーの拡大など、乗り越えなければならない多くのハードルがあります。

建廃協では、低炭素社会への取り組みとした具体策の一つとして、昨年より軽油に代わる重機等の燃料として「GTL」の導入を推進しております。軽油に比較してCO₂が8.5%削減され、煤(すす)が出ない、嫌な臭いも無いと作業環境の改善を含めた環境配慮に注力しております。低炭素社会の実現に向けては、私たち一人一人が温暖化に関心を寄せ取り組んでいく事が必要です。そしてそれが未来を価値あるものとするでしょう。

業界に目を向けると、日本経済の失速は建設廃棄物の業界にも大きな影響を及ぼすことと推測されます。市場は悪化が避けられず厳しい状況となりますが、建廃協は皆様と共に“相互扶助”の精神を更に強く持ち、信頼と連携によりこの難局を乗り越えて行く所存です。

どうぞ本年も変わらず、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。結びに、皆様のご多幸、ご健勝を祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。



アマビエ

建設廃棄物協同組合 理事長 富山 盛貴